デリダ『幾何学の起源』「序説」における「文学的対象の理念性」の在処

小川　歩人

ジャック・デリダが最初に公刊した著作は、現象学の創始者エトムント・フッサールの最晩年のテクストである『幾何学の起源』の仏訳およびそれに付された長大な「序説」であったが、同時期にデリダは「文学的対象の理念性」という博士論文の構想を抱いていた[1)]。フッサールは『起源』において、幾何学を範例とした理念性の構成を主題としているが、デリダは「序説」において、フッサールの企図を決定的に超え出るものとしてサルトルによる想像力の分析を挙げている（OG135/223-224）。周知の通り、サルトルはフッサール現象学の批判的継承をおこない、カント以来、感性と悟性を媒介するものとして重要な位置を与えられている想像力を「意識の〈非現実化〉する偉大な機能」[2)]として定義し、文学的想像力についての現象学を展開した[3)]。このようなサルトルの文学的想像力の議論を背景にしながら、デリダはフッサールの幾何学的対象の理念性に対して「文学的対象の理念性」についての思考を練上げようとしていたのである。

結局「文学的対象の理念性」の構想は博士論文に結実せず、一九八〇年にデリダはそれまでに出版した十冊の著書をもとに国家博士号学位審査を受けた。その公開口述審査の際に、デリダはフッサールの枠組みにおいて「文学的対象」は「縛られた理念性〔idéalité enchaînée〕」に位置付けられるだろうと述べているのだが、その内実は詳細には展開されることはなかった[4)]。また、「序説」ではジェイムズ・ジョイスの文学作品が挙げられるものの、具体的なテクストの分析はなされていない。

本稿はデリダの「序説」の理論的枠組みを分析し、デリダが提示しようとした「文学的対象の理念性」の内実に迫ることを目的とする。以下では、まずデリダが文学的対象に一括して与えた「縛られた理念性」という身分の内実を、フッサールの記述した理念化の過程に即して整理する（第一節）。次いで、デリダが、ヘーゲルの言語論を媒介として、フッサール現象学の枠組みに文学的想像力をめぐるブランショの解釈を導入していることをみる（第二節）。そして、散文と詩の対比を脱構築するブランショの「文学」の定義が、初期デリダの「文学的対象の理念性」という企図を表現することを示し（第三節）、その射程を検討する[5)]。

1. フッサールにおける文学的対象の位置

フッサール／デリダが『幾何学の起源』において主題化しているのは言語の問題である[6)]。最晩年のテクストにおいて、フッサールは、幾何学の創設者たちによって担われた真理の明証性が絶えず再活性化され、言語によって伝承される必要性を主張した[7)]。その際、彼にとって模範となるのは、「幾何学」を範例とし、一義的に意味が確定可能な透明な言語である。この晩年のフッサールに対して、デリダは、使用する語や表現に古今東西、無数の意味をまとわりつかせるジョイスの

『ユリシーズ』という対照的なテクストを並べつつ、言語の多義性は還元不可能であり、一義性と多義性は混じり合ってしまうのではないか、と注釈を加えるのである。「序説」において、デリダは、このフッサールにおける言語の問題を、理念性と感性的なものとの関係から分類している。本節では、まず理念性の領域を区分けしつつ、次いで感性的なものとの関係を検討することで、「文学的対象」にかかわる「縛られた理念性」の身分について確認しよう。

デリダは、フッサールによる「自由な理念性〔idéalité libre〕」と「縛られた理念性」という区別に言及しつつ（OG63/94, 105-106）、更にその区分を、⑴ 幾何学的真理の理念性、⑵ 志向された意味やシニフィエの理念性、⑶ 語やシニフィアンのような感性的形態の理念性という三つの段階に分節するかたちで整理している。

順番にみていこう。まず、⑴ 幾何学的理念性は絶対的に自由な理念性をもっている。例えば、「三角形の内角の和が180度である」という幾何学的真理は、個別言語の事実的主観性からも、対象の偶然的現実性からも解放された普遍性をもつ。これが、フッサールにとって幾何学的対象が最も完全な理念性の範例となる所以である[8)]。⑴ に対して、⑵ 志向された意味、シニフィエの理念性と、⑶ 語やシニフィアンのような感性的形態の理念性は、現実の偶然性に縛られているために「縛られた理念性」と呼ばれている。『起源』において例に出される「Löwe」という語を考えよう。「Löwe」という語は何度発話されても、同じものとして繰り返すことができる。しかし、「Löweという語」はあくまでドイツ語を話す人々の共同体における事実的主観性に制限されてしまっているために「縛られた」ものである。これに対して、「志向された意味としてのライオン」は、「Löweという語」よりも高い理念性をもつ。なぜなら、様々な事実的言語は「ライオンという同じ対象」を志向することができるからである。このシニフィエの水準の理念性は、全ての事実的な言語的主観性から解放されている。ただし、「ライオンという対象それ自身」は意味の表現でも意味の内容でもなく、あくまでこの地球に事実として生み出された偶然的現実に過ぎない。したがって、この水準においても理念性は縛られたまま、つまり有限なものなのである。

この区分において、文学的対象は「縛られた理念性」に位置付けられる。デリダは、フッサールの『経験と判断』であつかったゲーテの『ファウスト』の例を参照している（OG88-89/158-160）。フッサールによれば、『ファウスト』は、この世界の一文化的形成物である以上、ライオンと同様に現実世界の実在性から完全に自由ではない。しかし、『ファウスト』は任意の多数の実在の書籍のなかにあらわれ、作品の意味自体は何度読んでも、あらゆる言語に翻訳されたとしても同じものであり、それゆえに、ある種の理念性、つまり「縛られた理念性」をもつのである。

次いで、感性的領域との関連から「縛られた理念性」の位置付けをみよう。上述の理念性はすべて「ある種の理念性」がすでに成立した段階であり、異なる理念性のあいだの違いであるが、現実の偶然性との距離において「縛られた理念性」が語られる以上、感性的領域とのかかわりが示されねばならない。ここで、デリダは「感性的物体化〔incorporation sensible〕」（OG86/157）の過程を検討している。感性的物体化とは何か。デリダによれば、感性的物体化には（a）「絶対的に自由かつ客観的な理念性」から「縛られた理念性」への移行としての物体化と、（b）「縛られた理念性」から「感性的かつ現実的な出来事」への移行としての物体化の二つの場合が考えられる（IOG86-

87/157)。(a) は自由な理念性の、より低次の理念性への書き込みであり、あくまで理念性という水準内の移行にすぎないのに対し、(b) は理念性と感性という異なる水準を架橋する契機である。デリダは (b) をより詳細に検討し、フッサールが直接的には記述しなかったにもかかわらず厳格にフッサール的概念に基礎をおくものとして考えうる感性と理念性とのあいだの「媒介的理念性」という段階を提示する (Ibid.)。媒介的理念性は「曖昧な形態論的類型〔des types morphologiques vagues〕」[9] (OG135/201)、「純粋な感性的理念性」とも形容され、その中間的性質を際立たせられている。この感性的理念性は幾何学的対象のような絶対的な理念的同一性をもたないが、言語の経験的事実内でその都度認められる「つねに近似的である理念的同一性」をもつ (OG86-87/157)。そして、この水準は、語の縛られた理念性よりも更に縛られているものの、これがなければ言語のより高次の理念性が不可能である媒介的段階なのである。より具体的には、「書記的あるいは音声的記号の物体性〔la corporéité des signes graphiques et vocaux〕」に固有なものであるとデリダが述べるように、前述した語、シニフィアン以前の綴り字や音素の段階、その形の理念性の水準が問題とされる (Ibid.)。

整理すれば、まったく理念性をもたない「感性的実在」から出発して、幾何学を範例とする完全に「自由な理念性」という高次の理念性を獲得していく過程のあいだに、シニフィエの水準、シニフィアンの水準、文字や音素の形態の水準を含み、文学的対象が位置する「縛られた理念性」の領域があるということになる。

2. 想像力と言語

では、前節で示した文学的対象が位置する「縛られた理念性」はいかにして獲得されるのだろうか。デリダは「想像力〔l'imagination〕」によってであると述べる。彼は「想像力から生み出される感性的理念性の起源への接近は、それゆえまた、想像力そのものの直接的主題化を要求する」と主張し、感性的実在から形態論的理念性、つまり「縛られた理念性」の最初の段階が引き出されると指摘する。「[……]『危機』のなかで感性と同質の能力として示された想像力は、同時に、形態論的理念性を単なる感性的実在からもぎはなすもの」なのである (OG135/223)。

このとき、デリダは「Löwe」という語をめぐるフッサールの議論を、「Löwe」の事例を媒介にして、ヘーゲル哲学へと接続している。デリダは、フッサール現象学における理念化の過程と、ヘーゲル哲学における個別的感性的なものからより自由な言語的意味作用への移行（下記の引用で「現実存在の言語的中性化〔La neutralisation linguistique de l'existence〕」と呼ばれるもの）の並行性を指摘している。ライオンという語は、現実のライオンの個別性を無化することで、ライオンを思考の対象として自由にとりあつかうことを可能にするが、これは一節でみた理念化の過程と類比的なものである。つまり、感性的実在としてのライオンから、ライオンという語を経て、ライオンの志向的意味へと移行する、というように理念化の過程における「縛られた理念性」の生成の場面とみなすことができるのだ。

現実存在の言語的中性化という理念も、それが現象学の内部で受け取る固有な主題的意味によ

るのでなければ、本源的なものではない。[……] ヘーゲルは特に、それを詳しく探索した。『エンチュクロペディー』（これはフッサールが読んだと思われる数少ないヘーゲルの著作の一つでもある）のなかで、すでにライオンが、槍玉にあがって、この中性化を証言している。すなわち、「名辞―ライオン―を眼前にしたわれわれはもはやこのような動物の直観をも、そのイメージすらも必要としない。かえって、この名辞は、われわれが、それを理解するときには、イメージを伴わない単なる表象である。われわれはこの名辞のなかで思考するのである。（『エンツュクロペディー』第四六二節、J. イポリット『論理と実存』1953 年、39 頁による引用。イポリットのこの著作は、多くの点で、ヘーゲルの思考とフッサールの思考の深い収斂を現している。）

ヘーゲルはまた書いている。「アダムが動物を支配するようになった最初の行為は、それらに名辞を課すこと、すなわち、名辞がそれらをその現実存在という点で（つまり、現実存在者である限りで）無化することであった」（1803-1804 年の体系）M. ブランショ『火の地帯』1949 年、325 頁における引用。（OG58/99-100）

さて、このときデリダはブランショ（およびイポリット）のヘーゲル解釈を間接的に引き立てているが、それは彼らが悟性ではなく想像力＝構想力の役割を強調するゆえである。ブランショの文学論・言語論に対しては、しばしば言語による実存の殺害というコジェーヴのヘーゲル解釈からの影響が指摘される[10)]。しかし、ブランショは先の引用元であるテクストにおいて、現実から意味を引き剥がす言語の権能として悟性を指示していない。ブランショは、デリダが参照する『炎の地帯』において、あくまで想像力による現実に対する否定、想像的なものの非現実化の力能として、文学と言語の機能を規定しているのである[11)]。

文学は否定の運動の方に向かい、そのために事物は自分自身から引き離され、破壊されて人に知られ、服従させられ、伝達されるようになる。[……] 文学は、もしも否定が行われるとすれば、もろもろの事物が「現実的に〔réellment〕」組み立てる「想像的〔imaginaire〕」な全体の立場からそれらを眺める [……]。（PF318-319/417-418）

ブランショへの参照と同様に、『精神現象学』を中心に据えるコジェーヴの人間学的ヘーゲル読解を批判するイポリットへの参照は、上記のコジェーヴから距離を取るデリダのヘーゲル／ブランショ解釈の方針を強調するものである[12)]。というのも、イポリットは、デリダが参照する『論理と実存』第二章「意味と感性的なもの」において、感性的なものと、感性的なものから完全に切り離された悟性概念を媒介する重要な審級として、想像力＝構想力をヘーゲルの言語論に読み込んでいるからだ[13)]。

『精神哲学』の水準で感性的なものと悟性との根源的同一性を明らかにするのは、この言語の弁証法である。確かに、カントはカテゴリーの主観的演繹において、認識の普遍的自我と感覚

的多様性とのあいだの綜合的中間物を提供することを試みた。彼はおそらく構想力の中に、この悟性と感性との共通な源泉を見たであろう。[……] ヘーゲルはためらうことなく、このカントの構想力の中に、媒介としての、即自と対自の弁証法的統一としての、真の理性の萌芽を見ている。けれどもカントはただ、根本において認識を逃れる存在を、認識に近づきやすくすることを求めただけである。ヘーゲルはこの絶対的限界を無視する。（LE32/46）

このようにデリダが参照するブランショ（およびイポリット）の議論は、前節であつかった感性的段階から理念的段階へ移行していく「縛られた理念性」の獲得過程と並行的なものである。この参照を通じて、デリダが示唆したフッサール現象学を超え出る想像力論の可能性を、言語−文学論における想像力＝構想力の役割のなかに見出すことができるだろう。以下では、更にブランショの文学論を起点として「序説」における「文学」の位置を検討しよう。

3. 文学的対象の一義性と多義性

「序説」で参照される「文学と死への権利」において、ブランショはサルトルの『文学とは何か』で提出された「散文」と「詩」の有名な対比を下敷きにしながら自身の議論を組み立てている。本論の観点から重要なのは、その区別の「曖昧さ」である。

まず「散文」と「詩」という「文学」の二つの区分を整理しよう。ブランショは、「文学と死への権利」において、詩と散文という文学の二つの傾向を指摘している。まず「散文」とは、「意味」の「伝達」をおこなう形式であり、サルトルによれば「何かまとまった意見をあらわすために用いられ」、「一つの観念を正確に指し示すかどうか」が問題となるものである（QL25/56）。

これに対して、ブランショは「詩」があつかうのは意味ではなく「ものとなった意味」だと述べる（PF319-320/418-419）。「ものとなった意味」とは何か。ブランショが下敷きにしているサルトルの記述を参照しよう。「ものとなった意味」とは、事物としてのもの、意味内容の次元と区別される、響き、長さ、男性あるいは女性語尾の形態、無声のeといった「肉体の顔のようなもの」、「言葉の物理的な姿」の次元である（QL20/53）。そして、詩人は、様々な意義の間で選択をおこなうのではなく、「他の意義ととけあう物質的な一つの性質として詩人に与えられる」とされる。サルトルが例に出している「Florence」という語を考えよう。Florenceはまず語として、フィレンツェという町、フローレンスという女性名、ラテン語flosを由来としての花を意味しうる。そして、それらの意味はFlorenceという語の中で溶け合い、花なる町、花なる娘を含意するだろう。更に、Florenceという文字の形態のなかで、Flは「川（fleuve）の流動性」、orは「黄金（or）の優しい鹿子色の熱さ」、enceは「礼節（décence）」を意味し、語尾の「絶えず弱まっていく無声e」は、「含みある開花をどこまでも延長する」ニュアンスを表現する（QL21/53）。このように「ものとなった意味」の水準では、語は一つの観念に制限されない意味の広がりを不可避的に担ってしまう。

サルトルは、ものとしての言葉をあつかうことで多義性へ拡散していく詩を避け、明瞭な意味伝達を志向する散文を範例とした政治的アンガージュマンを目指そうとした。これに対して、ブランショは「文学は行動しない」し、「説明でもなければ完全な理解でもない」（PF327/429）という反

サルトル的な言明をおこないつつも、あくまで散文と詩の識別不可能性として「文学」を考えようとする[14]。つまり一つの観念の伝達を目指す散文的実践の次元と、ものとなった意味の水準を取り扱う詩的実践の「曖昧な」領域が「文学」と呼ばれるのである（PF321-322/ 421）[15]。

以上を踏まえて、本稿第一節で議論した理念性との関係から本節の散文と詩の区分を整理すれば、意味の伝達を主目的とする「散文」が意味の理念性の水準に対応し、ものとしての言葉をとりあつかう「詩」が語の理念性の水準および文字あるいは音素の水準の形態論的理念性の水準に対応し、それら全体が「縛られた理念性」としての「文学」の領域に相当する。

フッサールの試みは、幾何学的真理を範例とする一義的で透明な超越論的言語を設定することにより、真理の伝承の可能性を保証することにあった。この意味で、フッサールの試みはサルトルによる散文の称揚と類比的である。これに対して、ジョイスに代表される文学的対象は、本質的な多義性に開かれた言語であり、「詩的価値」を担うものである（OG104/150）。「序説」ではジョイスのテクストについて具体的な分析はなされない。しかし、1982年のジョイスコロックにおいて、デリダは「序説」の問題設定を呼び戻しつつ、『フィネガンズ・ウェイク』に見出される「he war」という二つの語について、英語（「彼は戦う」）とドイツ語（「彼はいた」）で異なった意味内容を指してしまう事態を例に出している（Jacques Derrida, *Ulysse gramophone deux mots pour Joyce*, Galilée, 1987, pp. 16-17）。本論の枠組みから言えば、この例は、シニフィエの理念性がシニフィアンの理念性や形態論的理念性と不可避的に混ざり合ってしまう事態として説明できるだろう。

これらはいずれも想像力によって感性的実在から引き剥がされる言語、すなわち「縛られた理念性」の水準にあり、そこで広義の文学＝文芸を截然と区別することは困難である。フッサールの一義的言語伝達の企図は、本質的な多義性に触れてしまっているのだ。フッサールは「純粋な歴史性のなかに還元しえず、ますます豊かになり、そして常に生まれ変わる多義性を承認せざるをえない」（OG105/151）。しかし、逆に、ある種の散文性、つまり意味の伝達が可能にならなければ、詩も読まれる可能性を失ってしまう。つまり、ジョイス的な現代文学の企ても「一義性にその役割を与えることによってしか成功しえなかった。少なくともそれは永久に誰にとっても理解できぬままであっただろう」（Ibid.）。ブランショは「文学と死への権利」において「散文」と「詩」の区分を曖昧にする「文学」の領域を見出したが、デリダは「序説」において、この構図を最晩年のフッサールのテクストのなかに埋め込む。デリダの「文学的対象の理念性」の企ては、「幾何学」的な一義性を目指す言語を、絶えず汚染する「文学」の領域によって二重化するのである。

自由な理念性	縛られた理念性＝文学的対象の理念性			感性的実在
客観的理念性	シニフィエの理念性	シニフィアンの理念性	形態論的理念性	
幾何学	（散文）	（詩）		
一義性	（一義性）	（多義性）		

終わりに代えて―幾何学に憑く文学

まとめよう。デリダのフッサール再読の試みは、幾何学的理念性構成の企図を追うとともに、サルトル、ブランショらの先行する想像力論・文学論を、フッサールの超越論的現象学の枠組みのうちに導入し、再度精緻に練り直そうとするものであった。初期デリダの「文学的対象の理念性」と

いう構想は、以上のように、幾何学と文学の出会う「超越論的領野」（OG85/133）を想像力による言語論として十全に展開しようとするものであったといえるだろう[16)]。

終わりに、本稿の議論の射程を整理するために、「序説」後半部の議論との関係を述べつつ、これ以後のデリダの歩みについて触れておこう。デリダが整理するように、フッサールにおいては「縛られた理念性」から「自由な理念性」への「跳躍」が問題とされるのだが、その際、「カント的意味での理念」についての議論が導入される[17)]。フッサールの議論の枠組み内においては、あくまで有限な想像力によって獲得される「縛られた理念性」は、幾何学の「自由な理念性」から峻別される。フッサールにとって、感性的な形態論的理念性はあくまで構成された幾何学の内部で「揚棄される〔supprimé〕」べきものであり（OG134/202）、フッサールにとって、「形態論的理念性は、志向性の予見的構造から、無限近似の理念的かつ不変な極へと乗り越えられ」ねばならないからである（OG146/213）。それゆえ、フッサールは、想像力とは別に幾何学的な客観性を創造する理念化を要請し、客観的理念性の構築へ向かう極限への移行を導くものとして、「あらゆる無限の義務のための統制的極」としての「カント的意味での理念」を導入する。「カント的意味での理念」は、幾何学が歴史のどこかで決して見失われることのないように、「極としてのテロスへ向かうパロールの推移、本源的ロゴスの純粋な伝承」を可能にするものだ（OG165/245）。しかし、文学的対象の多義性をカント的意味での理念によって統制しようとするフッサールに対して、デリダは、文学的対象が属するところの「感性的な理念性は、幻想的空間及び空間の科学、形態論的類型の予見し難く非有機的な増殖を生み出しうる」と述べる（IOG135-136/203）。そして、フッサールが幾何学の乗り越えに際して、カント的意味での理念という「歴史のうちなる隠れた理性」を呼び出そうとするのに対して、デリダは「本体的実体の想像的図式は消し難い」（OG160/240）ものであり、「〈存在〉の現示に対する〈言説〉の遅延〔retard〕」（OG170/249）が絶えず現れるのだと主張するのである。ここで提出される「遅延」という主題は、1960年代に独自の造語によって指し示される根源的な時間化、空間化としての「差延différance」というデリダの哲学的モチーフに繋がるものである（MP8）。本稿の観点からは、有限な想像力によって獲得される文学的対象と、無限を志向するカント的意味での理念に先導される幾何学的対象との絡み合いが「差延」という発想を準備しているといえよう。

この有限と無限の絡み合いという主題は、1960年代のデリダの哲学的主題をなすものであるが、第二節でみたように、フッサール読解と並行して、本稿であつかったイポリットによる想像力＝構想力を理性の萌芽とみなすヘーゲル解釈を介しても接続されている[18)]。例えば、1967年の『声と現象』においても、理念性を可能にする純粋な反復の力と、想像力との関連が示唆されつつ（VP61-62）、「無限の差延は有限である」という命題が、フッサール現象学以上に根底的なヘーゲル主義の名の下に語られている（VP123-124）。感性と理性のあいだの想像的な「文学的対象の理念性」は、「幾何学的対象の理念性」に絶えず「亡霊」のようにつきまといながら、初期デリダの理論的枠組みをなすのである。

このような理論枠組みはフッサール、ヘーゲル解釈にとどまらないデリダの関心を展開するものでもあっただろう。デリダは「序説」の翌年の「力と意味作用」において、ブランショの無のエク

リチュールと、カントの『判断力批判』における構想力論を接続しつつ、当時の構造主義批評に収まらない文学的対象の理念性の可能性を示唆している（ED15-17）。そして、本論で検討した最初期の著作以後、デリダは1960年代後半にフッサール、ヘーゲル、そしてハイデガーに対する更なる批判的検討をおこないつつ、自身が提示した理論的枠組みを発展させていくのである[19)]。以上、本論が提示した初期デリダの文学的想像力論への注目から発して、初期から晩年にいたるデリダの哲学と文学とのかかわりを思考する視座が提示されるだろう。

註

* 以下のテクストの引用に際しては、以下の略号を用い、続けて、原著頁数と、邦訳を引用する場合には対応する邦訳頁数を記す。例えば（OG14/15）。邦訳引用については一部引用者による表記変更をおこなった。引用中 [……] は省略、〔〕内は引用者による補足を表す。

Jacques Derrida の著作 : **PG** ＝ *Le probléme de la genèse dans la philosophie de Husserl*, PUF, 1990; **OG** ＝ *L'origine de la géométrie* d'Edmund Husserl, traduction et introduction par Jacques Derrida, PUF, 1962（エトムント・フッサール『幾何学の起源』田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、1976 年）; **ED** ＝ *L'écriture et différence*, Seuil, 1967; **VP**: *La voix et le phénomène. Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, PUF, 1967; **MP**=*Marges de la philosophie*, Minuit, 1972.

Jean Hyppolite の著作：LE ＝ *Logique et l'existence*, PUF, 1953（『論理と実存―ヘーゲル論理学試論』渡辺義雄訳、朝日出版社、1975 年）.

Jean-Paul Sartre の著作 : **QL**= *Que'est-ce que la littérature?*, Gallimard, 1948（『シチュアシオンⅡ』加藤周一ら訳、人文書院、1964 年）.

Maurice Blanchot の著作 : **PF**= *La part du feu*, Gallimard, 1949（『完本　焔の文学』重信常喜・橋口守人訳、紀伊國屋書店、1997 年）.

* 本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（18J10264）の助成を受けた研究の一部である。

1) Benoît Peeters, *Derrida*, Flammarion, 2010, p. 131.

2) Jean-Paul Sartre, *L'imaginaire*, Gallimard, coll. « Folio/ essais », 1984, p. 13.

3) 戦前の想像力論から戦後の文学論までのサルトルの思想的一貫性については以下を参照。赤阪辰太郎「新たな仕方で世界を描くこと：前期サルトルの哲学的企図についての試論」、『年報人間科学』、37 号、2016 年、pp. 87-103.

4) Jacques Derrida, *Du droit à la philosophie*, Galilée, p. 443.

5) Timothy Clark は、Henry Staten による「序説」の理念性についての議論から、デリダとブランショのエクリチュールの近さを指摘しているが、本論がその重要性を指摘する想像力の役割に触れていない。Cf. Timothy Clark, *Derrida, Heidegger, Blachot Source of Derrida's notion and practice of literature*, Cambridge University Press, 1992, pp. 72-73; Henry Staten, *Wittgenstein and Derrida*, Blackwell, 1978, p. 49.

6)『起源』は 1954 年に刊行された *Husseliana* 版以前に、1939 年 1 月に『国際哲学雑誌』に E. Fink 編集によって発表されているが、この Fink 編集版には言語についての記述の欠落がある（Cf. 亀井大輔「『フッ

サール「幾何学の起源」講義』―デリダとの読解との対比を通じて」『メルロ＝ポンティ読本』松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編、法政大学出版局、2018 年、pp. 300-309）。このことはデリダのフッサール解釈に影を落としている。例えば、Fink は、フッサールにおける「超越論的言語」の問いの不在を指摘しつつ超越論的記述にふさわしい「超越論的言説」の必要を提起し、また Suzanne Bachelard はそもそも言語の水準が「現象学的還元に無知であり、われわれを自然的態度に服させる」と主張していた（OG60/101-102）。このような先行するフッサール現象学の解釈を受けて、1953-1954 年に書かれた『フッサール哲学における発生の問題』において、デリダは晩年のフッサールの技術や想像、歴史といった主題が単に経験論的なもの、歴史主義への後退を示すものとみなしていたのだが（PG52, 270）、後に自身の『起源』の解釈を再検討する必要があったと注記している（PG264）。このことは『発生の問題』のデリダが、Fink 版の『起源』を参照し、前述のような超越論的哲学としての現象学の可能性を追求する Fink や Bachelard の解釈に依っていたからだと考えられる。これに対して、デリダは「序説」において、フィンクが主張した「超越論的言説」とは異なる、曖昧な「超越論的言語」（OG71/121）という問題設定を Husseliana 版のうちに見出し、超越論的現象学の臨界点として再評価するのである。

7)『起源』における幾何学の伝承の必要性については下記で論じた。小川歩人「分散と組織化の界面としての身体―デリダにおける Leiblichkeit 解釈について―」『フランス哲学・思想研究』、22 号、2017 年、pp. 112-123.

8) Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band:Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Husserliana Band XIX, Hrsg. v. U. Panzer, Nijhoff/Kluwer/Springer, 1984, pp. 48-50.

9)「形態論的類型」はフッサールによって「形態論的本質」として提示された概念であるが、デリダはフッサールからの引用を除き、一貫して「形態論的類型」と訳出している。これは想像による無限の自由変更を含む本質直観の議論と、想像変様の過程を経ながらあくまで有限なものとして到達しうる形態論的類型を区別し、また本質直観の理念化ではなく、本稿末尾で問題にするカント的意味での理念による理念化との関係を問うためであると考えられる。

10) Cf. 谷口博史「言葉と暴力をめぐって―ブランショ、デリダ、レヴィナス（上）」『みすず』、46 号、2 巻、2004 年、pp. 26-56. コジェーヴは『精神現象学講義』において、定在を言語による概念把握によって無化することを、感性的認識からの分離としての「ものの殺害」と呼んでいるが、その際、彼は「ものの殺害」の機能を「悟性」の権能に帰している。Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel, Leçon sur la phénoménologie de l'esprit professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes-Études, réunies et publiées par Raymond Queneau*, Gallimard, 1947, p. 545.

11) この引用は後述する文学の散文的傾向を説明するものだが、デリダが参照する『炎の地帯』所収の「虚構の言語」では、より明示的にサルトルからの影響がみられ、散文と詩の区別以前の言語活動全般に対する想像力の役割が記述されている（PF84/100）。1940 年代のブランショの文学論を、サルトルの想像力論・文学論と合わせて比較したものとしては以下を参照。門間広明「言語における想像的なものブランショとサルトル」『早稲田フランス語フランス文学論集』、12 号、早稲田大学文学部フランス文学研究室、2005 年、pp. 195-206.

12) 人間主義的ヘーゲル読解、『精神現象学』の特権化に対するイポリットの批判については下記も参照。

Jean Hypolitte, *Figures de la pensée philosophique I* , PUF, 1971. また、Lawler はイポリットの言語論や人間主義批判のデリダへの影響を指摘している。Leonard Lawler, *Derrida and Husserl, The Basic Problem of Phenomenology*, Indiana University Press, 2002, p. 89.

13) ただし、ここで引用されている『エンツュクロペディー』「精神哲学」単体では、イポリットの構想力＝想像力に重点をおくヘーゲル解釈を導出することは困難である。「精神哲学」の該当箇所を字義通り読めば、問題となる Einbildungskraft はあくまで再生産的構想力であり、構想力を感性と悟性との共通の根として、弁証法的理性へ接続するという読解は端的に難しいのだ。ここでは明示的な言及はないものの、イェーナ期ヘーゲルの重視に加えて、より同時代的な文脈としてハイデガーの『カントと形而上学の問題』（原著 1929 年、仏訳 1953 年）との理論的緊張関係を鑑みるべきであろう。ハイデガーは同書において、ヘーゲル哲学を『純粋理性批判』B 版における論理学化されたカントと同様のものとみなし、自身のカント解釈から差別化している（Cf. Martin Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Gesamtausgabe Band 3, Vittorio Klostermann GmbH, 1991, p. 244）。このようなハイデガーのヘーゲル解釈に対して、イポリットは『美学』における産出的構想力と「精神哲学」の記号論を合わせ、ヘーゲルの体系内部に超越論的構想力の重要性を読み込むのである（LE26/41）。後年のデリダによるヘーゲル記号論については MP 所収「竪坑とピラミッド―ヘーゲル記号学への序論」を参照。

14) ただし、サルトルは注で散文と詩の事実上の分割の困難を指摘しており、ブランショはその事実上の困難を引き受けることで自身の文学概念を主張しているといえる（QL43/69）。

15) 郷原はブランショのイメージ・文学論の二重性に関して、レヴィナスとサルトルの対比を指摘しつつ、二者択一ではなく二重性を強調する点にブランショとレヴィナスの差異をみている。本論でのデリダによるブランショ的立場の引き受けは、ED 所収の「暴力と形而上学」におけるデリダとレヴィナスとの差異にも重なるものであろう。Cf. 郷原佳以『文学のミニマル・イメージ　モーリス・ブランショ論』、左右社、2011 年、p. 16n.

16) 東は、ラカン派精神分析が想像界をシニフィアンの象徴的秩序から峻別するのに対して、デリダのエクリチュール概念が想像界と象徴界を跨るものであることを指摘している。Cf. 東浩紀「想像界と動物的回路―形式化のデリダ的諸問題」『サイバースペースはなぜそう呼ばれるか＋　東浩紀アーカイブス 2』、河出書房新社、pp. 232-260. デリダは、『ポジシオン』において、ラカン派精神分析の想像界、象徴界、現実界の三分法自体に先立つものとして自身の「差延」の思考を提示しているが、本論が提出する初期デリダの想像力論と後年のラカンとの関係については稿を改めたい。Cf. Jacques Derrida, *Position*, Minuit, 1972, pp. 112-119.

17)「序説」における「カント的意味での理念」の役割について述べた先行研究としては以下を参照。Cf. 長坂真澄「アポリアの始まり―若きデリダのフッサール『算術の哲学』読解―」『現象学年報』、30 号、日本現象学会、2014 年、pp. 133-140.

18) MP8. また「序説」における「遅れ」の主題を、後年の「差延」の議論と接続するものとしては以下を参照。Edward Baring, *The Yong Derrida and French Philosophy, 1945-1968*, Cambridge University Press, Cambridge, 2011, p. 180. また、デリダのヘーゲル主義における悪無限の重要性を指摘したものとしては以下を参照。Rodolphe Gasché, *Inventions of difference: on Jacques Derrida*, Harvard University Press, 1994, pp. 129-

149.

19) デリダは七十年代に「芸術（カント）」、「もの（ハイデガー／ブランショ）」と題された講義をおこなっており、また後年の「亡霊」という主題についてもカントの超越論的構想力（Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, Galilée, 1993, p. 227）やブランショの「中性的なもの」との関連が示唆されている（Jacques Derrida, *Parages*, Galilée, p. 151）。更に、「縛られた理念性」については最晩年の動物論でも扱われている（Jacques Derrida, *Séminaire: La bête et le souverain, volume 1 (2001-2002)*, ed. Michel Lisse, Marie-Louise Mallet et Ginette Michaud, Galilée, 2008, p. 241）。

La naissance de « l'idéalité de l'objet littérature » dans l'introduction de *L'origine de la géométrie*

Ayuto OGAWA

Jacques Derrida avait la conception de « l'idéalité des objets littéraires » comme thèse de doctorat, qui n'avait pas été rendue publique. Notre recherche tente de montrer ces traces dans l'introduction de *L'origine de la géométrie*. Premièrement, nous allons voir que, dans le cadre husserlien, « l'idéalité des objets littéraires » peut être interprétée comme « idéalité enchaînée » faite par l'imagination entre la sensibilité et l'entendement. Ensuite, nous voudrions montrer Derrida essaye à étendre le cadre husserlien aux analyses de Maurice Blanchot sur l'imagination. Cette réflexion permet de relier le point de vue phénoménologique à le cadre hégélien sur le langage imaginatif. Enfin nous concluons que Derrida a élaboré la définition de la « littérature » de Blanchot, qui déconstruit la distinction entre « la prose » et « la poésie », et elle exprime l'idée de « l'idéalité des objets littéraires » sur la limite de la phénoménologie transcendantale.